

フランスの祭りと暦



春をむかえる祭り

フランスは北国です。地球儀をまわしてみると、パリは北緯四十八度五十分、択捉島よりさらに北に位置していることがわかります。南フランスのニースやカンヌですら、札幌より緯度はたかいのです。もちろん海流や季節風の影響もあり、気候や風土は緯度だけで決まるわけではありません。けれども、春をまつフランスの人たちの願いは、私たちが思うよりもはるかに強いようです。

フランスはカトリックの国ですから、祭りはいうまでもなくキリスト教会の祭事暦（典礼）にしたがって行なわれます。そして、祭りのなかには、毎年きまった日に行われる祭りと、年によってちがった日に祝われる移動祝日とがあります。



厳しく長い冬のあいだにとり行なわれる祭りの中心は、クリスマスと復活祭という二つの祭りです。

クリスマスは、いうまでもなく毎年きまって十二月の二十五日に行なわれるキリストの誕生を祝う祭りです。けれども、キリストの誕生日は聖書にはっきり書かれているわけではありませんから、この日を降誕祭と定めるまでには曲折がありました。たとえば、ローマの暦にあわせて一月一日としようとしたり、一月六日としたこともありました。現在では、一月の六日は「東方の三博士がキリストを訪れた」という公現祭の祝日とされています。

クリスマスからこの公現祭までは「十二日」とよばれます。新しい年をむかえるこの時期は、季節の変わり目であり、精霊たちの訪れる特別な時でしたから、人びとは糸を紡いだり、厩の掃除をしたり、洗濯をしたりすることをタブーとして禁じ、訪れる精霊たちを驚かさないように気をつかいました。イギリスでは、シェイクスピアの劇で知られるように「十二夜」ともよびます。この期間に森に入ることも危険で、日が暮れてからは「呪うわれた狩人」に出会うと言われてたりしました。



クリスマスにツリーを立てることは、あまり古い習慣ではありません。けれども、クリスマスが近づくると森から木を伐りだして、三日も燃えつづけるような大きな薪を用意したことは、

よく知られています。家族がみんなこの火のまわりに集まり、一年の幸せや健康を祈ったのです。むかしは、この火に牛乳や蜂蜜や、時には葡萄酒をそそぐこともあったそうです。かまどや暖炉が姿を消しつつある都会では、もうこんな祭りは忘れられつつありますが、いまでも「ビッシュ（薪）」という木のかたちをしたクリスマス・ケーキがイヴの食卓を飾ります。

クリスマスが、冬至の時期とほぼ一致することは、多くの民俗学者によって指摘されてきました。冬至は、一年のあいだ働きつづけた古い太陽が死をむかえ、新しい小さな太陽が生命をえて輝きはじめる日です。この時期をキリストの降誕祭に選んだことは、たいへん意味ぶかいことのように思われます。冬のさなかに生まれた太陽と神の子の小さな生命が、厳しい寒さと戦いながら育まれてゆく。そんな希望を人びとに与えそうな気がします。

ローマ時代にも、インドに起源をもつ「光と太陽の神ミトラの祭り」が冬至の日に祝われていました。北国のゲルマンの人びとのあいだでも、この日は「ユルの祭り」とされ、祖霊のために盛んに火がたかれたと言われています。すこしまえのイギリスでも、クリスマスにたく大きな薪のことを「ユル・ログ」とよんだそうです。北欧のフィンランドなどでは、いまでもサンタクロースのかわりに「ユル・トンテ」という小人がやってきます。

ユルの祭りは、冬至のほかに夏至にも行なわれました。カトリック教会の典礼でも、夏至は「聖ヨハネ祭」とされ、やはり森から木をきりだして大きな火をたく習慣があります。一年に二度、太陽が盛んに燃え上がったり、新しい生命を受け継いだりする節目の日に、特別の火をたいて、その働きを励まし、豊かな実りや大地の再生を祈ったのでしょう。日本でも、冬のさなかの一月十四日の小正月にドンド焼きをして正月の飾りを焼いたり、一年の健康を祈ったりします。また、夏至に近いころ神輿をかついだり、たい松をたいたりして村をまわる「虫おくり」のときにも大きな火をたきます。洋の東西をとわず、冬至と夏至に火をたく祭りがあるのは、ふしぎな気がします。

さて、このクリスマスの祭りのサイクルが終わると、すぐに復活祭を迎える準備がはじまります。復活祭は、ゴルゴダの丘でキリストが十字架について死に、三日後によみがえったことを記念する祭りです。旧約聖書以来の伝統にしたがい、太陰暦の要素をとり入れて日取りを決定する移動祝日で、毎年春分の日あとの満月の次の日曜日に祝われることになっています。キリスト教の一年の祝祭のなかで最初にきめられた、歴史の古い祭りです。この日を起点として四旬節、昇天祭、聖霊降臨祭などのそのほかの大切な祭りの日取りも決定されますが、なかでも私たち日本人によく知られているのはカーニヴァルでしよ



う。(移動祝日の決定のしくみはすこし複雑なので右に一九九一年のおもな祭りの日取りをあげておきます。)

復活祭の準備のために信徒たちは主イエス・キリストの苦しみを懇って、四十日のあいだ肉食をたち、生活をつつしみます。この期間は「四旬節」とよばれます。この四旬節の始まる前日の「脂の火曜日」を中心に御馳走をたらふくつめこむ祭りが、カーニヴァルなものです。カーニヴァルの期間は地方によってさまざまです。すでに一月六日の公現祭をすぎたころから、人びとは仮面をつけて悪戯をしてまわったり、他人の家におしかけて酒や肴をねだったりする独特の悪ふざけをはじめ町や村もあります。しかし、祭りが絶頂にたつするのは復活祭の五十日前の日曜日（五旬節）と、それにつづく月曜、火曜（脂の火曜日）の三日間であるのがふつうです。この期間には、仮面のほかにも、男たちが女の扮装をしてねりあるいたり、藁でカーニヴァルの王様をつくって行列して馬鹿さわぎをしたりします。そしてこの藁人形は祭りの終わりとともに焼かれたり、川に流されたりしたのです。

この愉快的なカーニヴァルと陰気な四旬節の対立の情景は、ブリューゲルの有名な「カーニヴァルと四旬節の戦い」に象徴的に描かれています。この絵の前景では、まるまると大ったカーニヴァルの代表が大きな酒樽のうえにのり、青白い四旬節の代表にむかって焼肉の串をつきだしています。その背後には市がたち、人びとは食べ、飲み、歌い、愛を語っています。これに対して四旬節の代表は、断食中の食べ物であるやせたニシンを二匹つきだし、背後には教会にむかい、施しをしながら主の復活にそなえる敬虔な人びとが描かれています。



カーニヴァルには豊穰祈願の祭りのときのように動物の仮装もですが、よく知られているのはピレネー地方の「熊」です。この地方では、脂の火曜日にひとりの若者が毛皮をかぶって熊に扮し、これも若者が演じるロゼッタという娘をおそい、性的なきわどいしぐさをします。これを狩人に扮した若者たちがおいかけ、村中をねりあるのです。そして、村の広場につくと熊はもういちどロゼッタをおそい、狩人にうたれて倒れて死に、最後にまたよみがえります。

ここで演じられる死と再生のドラマは、まさにカーニヴァルの本質をあらわしているといつてよいでしょう。四旬節によって象徴される神の死と長く厳しい冬を前に、人びとは大いに飲みかつ騒ぎ、扮装して男と女の垣根をとりはらい、擾雑なしぐさをふりまいて日常生活の秩序をおもいきりぶちこわします。そして、祭りの終わりには人形をもやしたり、熊を殺したりして穢れをはらい、敬虔な気分でキリストの死と苦しみをおもう断食の生活に入ってゆくのです。やがて長い冬は終わりをづけ、豊かな春がやってきます。この春の訪れが、乱暴で猥雑な熊の再生割によって予感され、復活祭の場でのキリストのよみがえ

りによって現実的なものとなるのです。

五月の祭り

フランスの五月は、美しい季節です。ことに北フランスは、梨やりんごなどの花がさきみだれ、森にはすずらんの薫りがただよいます。けれども、この季節に突然訪れる寒さは、作物をおそい、収穫をだいなしにしてしまうこともあります。五月の祭りは、大地と緑のよみがえりを祝うと同時に、クリスマス、復活祭とつづいた春迎の祭りのサイクルをしめくり、冬の寒さと決定的に別れをつける意味があるのです。

五月にも、もちろん毎年日取りの決まった祭りや移動祝日とがあります。日取りの決まった祭りのなかでは、五月の三日の「十字架発見の祝日」が一番大きな祭りで、聖女ヘレナがゴルゴダの丘でキリストの十字架を発見したことを祝います。移動祝日は、復活祭から四十日目の木曜日に行なわれる「昇天祭」、五十日目の日曜日の「聖霊降臨祭」が大きな祝日で、豊穡祈願の道行は昇天祭の三日前の月、火、水の三日間に行なわれます。



しかし、こうした多少なりともキリスト教的な祭りのほかに、まったく教会の関知しない祭りもあります。たとえば、五月一日の前夜に若者たちが森に入り、五月の木を伐ってくる行事がこれです。この五月の木には、町や村の広場にたてる大きな木を若者たちがみんなで力をあわせて伐りだしてくる「集団の五月の木」と、一人ひとりが自分の意中の娘のために木を伐って娘の家のまえに飾る「個人的な五月の木」の二つの種類があることは、本書にくわしく述べられているとおりです。



五月の一日は、いまでこそ「メイ・デー」であり労働者の祭典ですが、古代のケルト人たちのあいだでは「バルティナ」あるいは「ケートハブン」とよばれる祭りでした。ケルト人たちは、一年を暖季と寒季のふたつにわけ、暖季をむかえるこの日を、寒季の訪れる十一月一日の「サアオイン」あるいは「ハロウマス」の祭りとともに、季節の変わり目の祭りとして大切にしていたといわれます。そして、この祭りの前夜は、とくにゲルマン系の人びとのあいだで「ワルプルギスの夜」とよばれ、ドイツなどでは魔女たちがサバトをひらき跋扈すると伝えられていました。



十一月一日の前夜がやはりイギリスなどで「ハロウィーン」と呼ばれて、悪霊の訪れる夜と信じられていたことと考えあわせると、この伝承はたいへん興味ぶかく思われます。ことにハロウマスは、「異教時代の北ヨーロッパの農民にとって、山野を彷徨する祖先の霊を寒くなるまえにわが家の炉ばたに迎える日であり、放牧中の牡牛をわが家に連れ戻す日であった」といわれています。(三好洋子他著『深層のヨーロッパ』 一九九〇年・山川出版社二三二頁)

季節の変わり目に訪れる魔女や悪霊というおそろしい超自然的な存在も、キリスト教のいきわたる以前には、もしかすると死者の霊(祖霊)であったかもしれません。村や町を訪れた死者たちの霊は、きちんと祀られる場合には家や共同体を守る大切な神となりますが、帰る家がないと、おそろしい悪霊となってたたりをもたらすという信仰が未開社会には多くみられます。現在のキリスト教の典礼でも、十一月一日と二日は「万聖節」と「万霊節」で、ともに死者を祀る日です。

もしこうした仮説が正しいとすれば、その祖霊の訪れる夜に伐った木を五月一日に町や村の広場にたてることは、祖霊を共同体の中心にむかえ入れることで、たいへん意味深いことだといえるでしょう。日本でも、私たちは正月に門松をたてますが、かつてはこれも山から松の木を伐ってきて家に迎えたものでした。柳田國男以来の日本民俗学の考えにしたがえば、この松こそ祖霊のやどる木であり、家々に新しい年の幸をもたらすものだったのです。

五月の木を村の広場にたて、それをかこんで若者たちが宴をひらき、ダンスやロンドをおどることは、すこし唐突な比較のようですが、日本の盆踊りともよく似ています。いまでこそ、盆踊りは町内会の年中行事で、老人と子供のほか見向きもしませんが、かつては若い男女が心おきなく心を開き、愛を語りあうことのできる数すくない機会でした。盆がまたケルトの五月と同じ



ように、日本人にとっては一つの季節の変わり目であったことや、正月とともに祖霊の帰ってくる大切な機会であったことも、興味ぶかい事実です。昔の盆踊りは、よく笠をかぶったり、手ぬぐいで顔を隠したりして町や村をながして歩いたものですが、これも「踊り手が帰ってきた祖霊(死者)を演じているのだ」という指摘がよくなされました。いまでも、越中八尾の「風の盆」などにはこの風習がよく残されています。また海辺の地方で、盆に海にでると船幽霊にであうとあって漁をつつしむように、この季節に多くの怪談が語られることも、ハロウィーンやワルプルギスの夜とよく似ています。

このように五月の木を「祖霊を迎える木」と考えるのは、もちろん一つの解釈です。ヨーロッパでも、マンハルトやフレイザーのような十九世紀のすぐれた人類学者たちは、もっとちがった見方をしていました。彼らは「古代の人々が、樹木の精霊にたいするふかい信仰をもち、そこに農作物や果実を实らせる力の根源があると信じていた」と推測したのです。五月の木を広場にたてる祭りには、そうした豊かな実りの力をもたらす樹木の精霊

を町や村に迎え入れるという大切な意味があります。

本書にも少し登場する「フェイユ」や「モシュ」などと呼ばれる樹木の精霊は、マンハルトやフレイザーのこうした考えを「五月の木」よりも、もっと直接的に表現しているといつてよいでしょう。ドイツをはじめ北ヨーロッパに多い民俗ですが、フランスでもニヴェルネやアルザスの各地にみられます。図5の写真にみられるように、頭からすっぽりと木の葉や苔で覆われた若者が、五月の一日か、最初の日曜日のあたりに村の家々をまわっ喜捨をあつめ、豊かな実りが訪れるよう祝福をあたえて歩くのです。



この「フェイユ」や「モシュ」は樹木の精霊であると同時に「森の王」そのものでした。ここで、ことにフレイザーが強調しているのは、この王の死と再生の儀礼です。彼は『金枝篇』のなかで、聖霊降臨の日にドイツの下バイエルンのニーダーベリンクにあらわれる樹木の聖霊についてこう書いています。

「聖霊降臨祭の樹木の聖霊の代表（いわゆるピングストゥル）は、頭のとっぺんから足の先まで葉と花で包みこまれていた。（……）衣服の袖も植物で出来ており、体のその他の部分はハンノキとハシバミの葉で包みこまれていた。彼の両側には少年が一人ずつ、ピングストゥルの腕を支えながら進んだ。この二人の少年は抜き身の剣をたずさえていたが、行列に加わる他の者どもも多くは同様であった。彼らは贈り物をもらおうと思う家ごとに停まった。そうすると物かげにかくれている人々が、葉にくるまった少年に水をかけずぶ濡れにするのであった。彼が頭からずぶ濡れになると人々はみな喜んだ。最後に彼は小川に入って行って、腰のめなりまで来るところを徒渉した。そうすると二人のうちの一人が橋の上に立っていて、彼の首をきるまねをするのである。」（フレイザー『金枝篇首』永橋卓介訳・岩波文庫・一九五一年・二八五頁）

フレイザーによれば、「樹木の精霊」の死と再生のドラマチックな表現は、森と大地の新しい誕生を象徴的にあらわしているのです。厳しい冬のあいだ凍てついていた大地と眠っていた木々の力は、春の訪れとともによみがえります。そして、この新しい力を身につけた「森の王」は、一度死ぬことによって古い自分を捨て、新しく生まれかわり、作物や動物たちに若々しい実りの力を分け与えることができるようになるのです。



こうした「フェイユ」や「モシュ」のような樹木の精霊は、北フランスには多い民俗ですが、プロヴァンスやラングドックなどの南仏にはみられません。こちらでかわっ

て登場するのが「五月の女王」です。五月の女王には、フレイザーのいう死と再生の儀礼というぶっそうな要素はありませんが、花の冠をつけ枝を手にした初々しい乙女の起源が森の女王であるといわれれば、素直にうなずきたくなります。イタリアのポティチエリの描いた「プリマヴェーラ（春）」を、この森の女王の仲間に加えれば、この確信はますます強まりそうです。

さらにまた、マンハルトやフレイザーの考えは、若者たちが自分の気にいった娘たちの家の前に森から伐りだした若木をたてるという「個人的な五月の木」の民俗もうまく説明することができそうです。農作物や果実を実らせる若い力は、人間の男女のあいだにも認められるからです。森の木々が若がえり、大地に新しい生命をよみがえらせる季節は、若者たちにとっても恋の季節であり、新しい生命を体にやどすにふさわしい時でした。この季節に、豊穰性の根源である縁の技やうつくしく薫る花々を贈ることは、きわめて分かりやすい愛の象徴表現ではなかったでしょうか。

都市の祭りと農村の祭り

このような非キリスト教的な祭りにたいして、十字架発見の祝日、昇天祭、聖霊降臨祭、豊穰祈願の道行きなどは、教会の典礼のうえで定められた祭りですが、やはり異教の色彩をこく残しています。たとえば、十字架発見の祝日にハシバミの枝を用意して、小麦やぶどうの畑に植えたり、家の門口や納屋や養蜂小屋にまで刺す行事は、五月の木と同じように森の若木のもつ不思議な力で、豊かな実りを願ったり、災害から守ったりすることを目的としていたのでしょう。なかでも愉快なのは、麻の畑のために用意する十字架です。できるだけ長い枝を用意して、麻がそこまで伸びるように願いをかけたというのです。

こんな農耕儀礼にみられるささやかな願いも、私たち日本人には親しいものだったのではないのでしょうか。たとえば、私の調査した長野県の白馬村では、かつて一月十四日の小正月の日にまだ雪の深く積もった庭に苗代をつくり、山から伐ってきた松の枝をさして田植えのまねをして、稲がたくさん実るように祈りました。この小さな松の枝にも、新しい年をむかえた山の木の力と山にすむ神の祝福がこめられていたのだと思います。

また、九州地方では、祭りの日に山から枝を伐ってきて家内安全を祈って門口や軒先にさす「柴サシ」という行事が行なわれます。全国的に行なわれる節分に柗を戸口にさして鬼を追い払ったり、五月の節句にショウブやヨモギを軒や屋根にさして蛇の侵入をふせいだりするものも、これとよく似た民俗です。

「五月の木を堆肥にたてると、魔女が堆肥の養分を奪うことができない」という小さな記述もありました。日本の正月にも堆肥の山に松をたてる風習がみられます。これもまた、堆肥にゆたかな養分がやどるようという願いがこめられていたのでしょう。同じ農耕の文化とはいいいながら、ここまで類似がかさなると不思議をとおりこして、あきれかえってしまいます。

しかし、こうした類似のなかでも最も興味ぶかいのは、豊



穰祈願の道行きです。豊穰祈願の道行きは、その起源は異教時代のものであっても、今はまぎれもないキリスト教の祭りです。教会から出発した行列が司祭を先頭にして、野原の道をゆっくり行進し、道ばたの礼拝堂や十字架のまえで立ち止まり、耕作地を祝福して歩くのです。

この道行きで大切に思われるのは、耕作地に豊かな実りを保証するのが、「五月の木」のように森から伐りだされた若木や、そこにやどる樹木の精霊だけではないということです。道中で、際限もなく繰り返される連祷や聖歌に耳をかたむけるのは、まぎれもなくキリスト教のいう「神」なのです。



けれどもこの神は、いかに神学が全能説や偏在説でとりつくろっても、天にただ一人いるだけのきわめて遠い存在で、直接にすべての信徒の祈りに答えることはできません。代わって祈りに答え、祝福をあたえるのは、いわば神の代理人であり仲介者である司祭です。それではあまりに形式的で、神の肉声にはほどとおいような気がします。そこで、神の介在をもっと現実的なものとし、祈りの効力を保証する仕掛けが必要になります。その代表が、「聖遺物」をおさめた箱ではないでしょうか。

「聖遺物」というのは、キリストや聖人たちの遺品です。髪や骨や歯や着物の一部など古びた気持ちの悪いものばかりで、現代では理解しがたい信仰のようですが、中世期にはつよい信頼をあつめ、ことに教会を建造するうえではなくてはならないものでした。たとえば図7のファンデル・ワイデン（十五世紀）の作とされる絵には、ミサの最中にあらわたキリストの背後に、キリストの汗をふいた「ヴェロニカの布」、手足を十字架にとめた釘、うたれた鞭など「尊い」聖遺物が一式かきこまれ、当時のフェティシズム（物神崇拜）のありようをとどめています。こうした信仰は、一般にヨーロッパ独自のもので私たちに縁遠いとされていますが、日本でも寺の建立にあたって、各地の寺院で仏舎利のような「聖遺物の仏教版」が納められるのですから、発想は似ています。それに、聖遺物を納めた金ぴかの箱は、どこか日本の祭りの神輿を思わせませす。



日本の神輿は、町や村の祭りに際して、山や森から訪れた神をのせて、人びとの暮らしを直接に見てもらい、商売の繁盛や田畑の豊かな実りを願うための「神の乗り物」です。フランスの豊穰祈願の道行きでも、日本の祭りとおなじように、旗や十字架に導かれて聖遺物箱がやってくると、人々はなぜか直接に神がやってきたような敬虔な気持ちにおそわれるのではないのでしょうか。この金色の箱のなかには、神輿や山車に御神体がおさめられているように、何か神と直接にコンタクトした名残り（＝遺物）が納められているのです。

それは、神そのものではありませんが、やはり神の存在を具体化し、身近にする仕掛けなのだと思います。

これは小さなことですが、神輿が町や村をめぐる途中に、疲れて道ばたの「お旅所」という中総点で一休みするのも、豊穰祈願の道行きが野原の十字架や礼拝堂のまえで一服するのと似ています。

豊穰祈願の道行きには、聖遺物のほかにもさまざまな仕掛けが登場します。「聖遺物箱」だけが、神の存在を保証するものではありません。日ごろは教会の奥にひっそりとしまわれている聖像や、美しく釣られた十字架や旗や聖水や香も、神の臨在をアピールし、祈りや祝福にかけがえのない効力を与えます。また、そこには森から伐ってきた緑の枝や香ばしい花も彩りをそえています。「森の王」も「樹木の精霊」も、耕作地の祝福のために一役かっているのです。そこには、さまざまな信仰と仕掛けが、時代や立場をこえて集まり、重なり合っ、ひとつの祭りをつくりあげている姿がみられます。



豊穰祈願の道行きにみられる、こうした文化の重層性をはっきりと示すのは、祭りの人的な構成です。そこには、大きくわけて「教会」と「民衆」という二つのちがったタイプの集団がかかわっているといっいでしょう。そして、このかかわり方も、農村と都市ではかなりことなります。

まず「教会」というのは、司教、司祭、参事会員、修道士などという形で登場する人びとの集団です。農村の場合は、たいがい一つの教会と教区からできていて、一人の司祭がこれを守り、せいぜいそれを助ける助祭や下男がいるていどです。これにたいして都市には、たくさんの教会があります。ことに大都市には、教区の教会や司祭を統括する司教区があり、司教と司教座教会（カテドラル）のもとに、補佐の司祭や助祭で構成される参事会があります。そして多くの司祭が、町中に点在する教会の信者たちを指導したり、刑務所や病院や老人ホームなどの施設の世話をしているのです。



都市には、このほかに修道会があります。修道会の人びとは、原則として町の生活と世俗的な交渉をもたず、独立した生活をおくっています。司教をはじめ教会の組織とは不可分の関係を保っていますが、時には司教の言葉すら拒否するほど強い自立性をもっています。

都市の豊穰祈願の道行きには、教会関係者だけでも、これほど地位や生活のちがう人たちが参加するのですから大変です。それに、祭りのなかでは、日ごろの地位や力関係とはまったく別の力学が働きます。たとえば、司教は大変偉いのですが、必ずしも祭りの主役

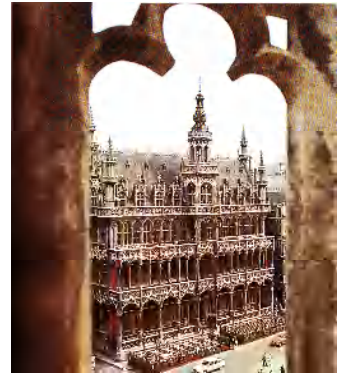


になれるとはかぎりません。また、列に参加するだし物も、大きな教会だからといってよい物が出せるとはかぎらないのです。たとえ司教区のなかではとるに足らない教会でも、由緒や伝説によって、祭りに欠かせない宝をもっていることがあります。

たとえば、トロワの豊穡祈願で一番人気のあった「シエール・サレ」というドラゴンは、聖ルー修道会に保管されていました。神聖な豊穡祈願の行列のたびに大騒ぎをくり返すドラゴンを、堅物の神学者たちがよい気分で見ているはずはないのです。まして、それが町の教会組織からなかば自立した修道会のものとなれば、争いがおこっても不思議はなかったといえるでしょう。

祭りを構成するもう一つの大切な集団は「民衆」です。農村の場合には、これも女たちが豊穡祈願の祈りに集まったり、男たちが耕作地をまわったりしますが、基本的には農民のみによって構成されていますから組織は簡単です。これにたいして、都市にはさまざまな職業と階層の人たちが生活しています。この人びとの祭りへの参加形態は複雑で、幾つもの集団がたがいに助けあい、反発しあいながら、祭りをとり行なうことになります。

まず、都市の祭りの「民衆」を代表するのは、なんといっても職業集団＝ギルドです。今日でもベルギーや北フランスのブリュージュ、ガン、アラスのように中世期の栄えた町を訪れると、町の中央には市庁舎と教会とギルド・ハウスがそびえています。そこには、かつて織物職人、武器職人、皮革職人、石工などさまざまな職人たちが拠をかまえ、町の経済や政治に大きな力をふるっていたのです。彼らは、それぞれ旗や紋章や守護の聖人をいただいていたから、祭りはその威力を示す絶好の機会でした。本書にも、ルーアンのガル



グイユの行列に、織物職人と植毛職人が守護聖人の聖ブレーズの聖遺物箱をかかげて行進したと述べられています。また、大食いのドラゴンの口にはおりこむ祭りのパンやお菓子を提供したのが、パン焼き職人の組合であったとも記されています。

祭りを構成する二つ目の「民衆」集団は、男女の年齢集団です。農村の豊穡祈願でも、美しい歌声をひびかせて聖歌をうたって歩くのは、教会の少年合唱団でした。ルーアンのガルグイユの行進にも三十人ほどの貧民学校の生徒が登場します。しかし、なかでも祭りで大活躍するのは若者たちです。ヤナギづくりのドラゴンのなかに入って町中を



ねり歩いたり、ドラゴンにつきそって走りまわったり、「シヌブレ」の芝居でサラセン人を演じたりします。ピレネーの「熊」の芝居で、熊や狩人やロゼッタを演じたのも彼らでした。ジニャックのロバの祭りでロバのなかに入るのが、その年に徴兵を受けた若者であるというのも大切な点です。かつての徴兵は、現在の成人式と同じようなイニシエーションの役割を果たしていましたから、祭りの前夜にロバの頭を飾って人びとの歓呼に答えるというのは、一人前の若者になる晴れがましい儀式のひとつであったといえるでしょう。

勇壮なドラゴンの祭りが男たちのものであったとすれば、五月の女王をえらぶ祭りは女たちのものでした。ところによって女王の年齢こそちがいますが、いずれも、女になるまえの娘たちの晴れの舞台であったことにはかわりはないようです。

こうして、異なった年齢集団が男女ごとにそれぞれ祭りの役割をはたす仕組みは、そろいの法被で若者たちが主役を演ずる私たちの国でも、よく知られています。

祭りを構成する三つ目の「民衆」集団は、信心会です。もとのフランス語はConfrérieですから「兄弟会」ともいわれます。日本の祭りのなかで重要な役割をはたす講とも大変よく似ているので、「講」「講社」などと訳すこともあります。その起源や性格はさまざまで、本書にも「マリアの子供」「乙女マリアの娘」「聖ロマン」「ロザリオ」など聖母や聖人や特定の信仰に捧げられたもっともらしい信心会から、梳毛職人、執達吏、農民など職業にもとづく信心会、「ガルグイアール」などというドラゴンをかつぐ祭りだけを楽しみにしている信心会まで、いろいろ登場します。こうした民衆のあいだの信仰組織は、とかく閉ざされがちであった中世以来のヨーロッパ社会で、地域や階級をこえた生きいきとした人間関係をつくるうえで大切な役割を果たしてきたのですが、残念ながらまだ実態が十分にはわかっていません。ただいえることは、信心会の人たちが祭りが大好きで、積極的にパレードを組織し、豊穰祈願の道行きでも重要な構成メンバーであったということです。



これらのギルドや若者組や信心会の人びとにとって、祭りは晴れの舞台であればあるほど、たがいに競いあう葛藤の場でもありました。豊穰祈願の行列でも、それぞれが美しく着飾り、紋章入りの旗や聖像やドラゴンをおしたてて、勢力を争ったのです。この競争の激しさは、講や社中が、それぞれ神輿や山車を出してぶつかり合う神田の三社り、京都の祇園祭り、博多の祇園山笠などを思いおこせば、容易に想像がつくのではないかと思います。こうした激しいぶつかり合いと、そこに生まれる一瞬のカオスのなかで、人びとは解け合い、ゆるし合い、また新しい秩序をつくりあげていったのでしょう。

けれどもフランスでは十七世紀以降、教会も近代の論理をとりいれはじめ、祭りの暴力やカオスを厭うようになります。そして、都市はしだいに祭りをうしない、ドラゴンは姿をかくし、鋳物屋に売られて溶かされてしまったり、教会の地下室で微くさい夢をむさぼることになるのです。

(これは、『フランスの祭りと暦』(原書房)の<解説>に加筆したものです。)